



KURUME UNIVERSITY ISM

「教育・研究・医療」を通じて
地域と向き合い共に進化し挑み続ける。
それが、久留米大学イズム。

SINCE 1928

KURUME UNIVERSITY

100th

医学部を母体に進化し、地域と共に歩む総合大学

地域に根差し 社会が求める 人材育成に励む

久留米大学は1928年に九州医学専門学校としてスタートし、文・人間健康・法・経済・商・医学部の6学部13学科、4大学院研究科、20の研究所・センターなどを有する西日本有数の総合大学へと発展。2018年に創立90周年を迎えました。「実践的人材の育成」と「地域への貢献」を基本理念に地域に根差した医師の養成や社会が求める人材の育成に励み地域と共に歩んでいます。

HISTORY

KURUME UNIVERSITY ISM

創立 1928



創立時の大学本館



石橋 徳次郎氏



石橋 正二郎氏

日本足袋株式会社の社長だった石橋徳次郎氏と専務取締役で弟の正二郎氏【(株)ブリヂストンの創業者】から、広大な土地と3階建ての学校本館【現：大学本館】が寄贈された。

1949

久留米医科大学に、昭和天皇のご巡幸があり、当時細菌学実習室であった展覧場にて小野寺学長が日本住血吸虫についてご進講。

1952

医学部を開設。

1956

大学院を設置し、医学研究科を開設。

1950

- 久留米大学を設置し、商学部を開設。
- 商学部校内に久留米大学附設高等学校を設置。



商学部開設時および附設高校設置時の正門



1932年当時の大学病院



現在の大学病院

1968

医学部附属衛生検査技師学校を設置。(1976年6月～現在に至る臨床検査専門学校の前進)

1966

医学部附属高等看護学校を設置。(1994年4月～現在に至る医学部看護学科の前進)

1969

附設中学校を設置。

1987

法学部を開設。

1992

文学部を開設。

1989

- 大学院比較文化研究科を開設。
- 地下2階、地上3階建ての御井図書館が落成し、御井キャンパスのイメージを一新。現在、医学図書館も含めた蔵書数は約99万冊を誇る。



御井図書館

1994

- 商学部経済学科を経済学部経済学科に改組転換。医学部に看護学科を増設。
- 医学部附属医療センターを開設。旧国立久留米病院から経営委譲され、当院が担ってきた地域医療を引き継ぐとともに地域医療の充実と患者中心の医療体制の確立を目指した。また、1998年にはリハビリテーションセンターを開設し、良質な医療の提供を行っている。



医療センター

2001

大学院心理学研究科を開設。

2004

法科大学院を設置。

2005

大学院ビジネス研究科を開設。

2009



1000号館

御井キャンパスに創立80周年記念事業の一環として、さらなる教育の充実を図るために新・情報教育センターと心理学研究部門を含めた講義・研究棟「1000号館」が完成。約1,000台のパソコンを配置し、学生が自由に活用できる体制を整え、グループ学習に対応する多目的教室なども完備。

2018

旭町キャンパスに創立90周年記念事業の一環として基礎3号館と病院北館が完成した。病院北館には最新の放射線治療機器などを導入し、がん治療の進展などが期待されている。

2017

- 人間健康学部を開設。
- 本学医学部第14回卒業生で日本医師会会長の横倉義武氏(2012年就任)が、第68代世界医師会会長に就任。世界医師会は約113カ国・地域の医師会が加盟する組織で、日本人の会長就任では3人目。

2016

御井キャンパスに創立90周年記念事業の一環として、ラーニングcommons、ラウンジなどを備えた「御井本館」が完成し、新たな学びの環境が整う。



御井本館

INDEX

トップインタビュー >>>>> P3 - 4

事業概要 >>>>>>>>>>>> P5 - 6

先端研究 >>>>>>>>>>>> P7 - 10

医療 >>>>>>>>>>>>>>> P11 - 14

文医融合 人づくり >>>>> P15 - 18

産学官連携・地域貢献 >>> P19 - 20

組織図・附属学校 >>>>>> P21 - 22

すこやかな「次代」と「人」を創る 研究拠点大学へ

組織一体となり深化させる久留米大イズム

03

本学が立地する久留米市は『医者のみち』といわれるほど人口当たりの医療機関や医師の数が多い都市です。本学も地域に根差した大学として医学部と大学病院がその中心を担い、現在では西日本有数の総合大学へと発展してきました。

2017年度から21年度までは、教育・研究・社会貢献・医療に関する将来ビジョンに基づく事業を展開中で、各組織が一丸となって「社会貢献・地方創生」を目指しています。

本学の研究の中でも先端的がん治療・研究は高い評価を受け、17年度の文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に採択されました。事業名は「すこやかな『次代』と『人』を創る研究拠点大学へ～先端がん治療・研究による挑戦～」で、先端癌治療研究センターを中心に事業に取り組んでいます。

本事業では以前から進めてきたがんペプチドワクチンや進行肝がんに対するNew FP療法などの治療法の開発、それらを実践する人材育成を推進していきます。さらに本学における多彩な

研究の中に潜むがんの新規診断法や治療法を見いだす可能性のある研究シーズを発掘し、がんの早期発見・診断、治療法開発、予防法へと応用を図ると同時に、それらの研究者の育成にも注力していきます。

本学では、より社会の要請に応えようと2017年に「文医融合」の人間健康学部を新設し、医学系の知識も備えた幼稚園教諭や保育士、スポーツ分野に貢献するトレーナーなどの人材を育成しています。研究ブランディング事業は人間健康学部などとも連携しながら全学を挙げて、地域における子育て支援から健康増進、疾病予防、高度な医療の開発・提供に至る生涯サポートを実現し、地域社会全体の問題解決に貢献していくものです。

創立以来、医療の進化に挑み続け、あらゆる角度から地域と向き合ってきた久留米大学イズム。大学全体でイズムをより深化させ、ブランド力を高めつつ、創立100周年を目指したいと思っています。

久留米大学理事長・学長

永田 見生

1973年久留米大学医学部卒。81年医学博士。98年久留米大学医学部整形外科教授、2005年久留米大学病院副院長、09年久留米大学医学部長。12年から学長、17年より学校法人理事長を兼務。医学博士。



PRESIDENT
TOP INTERVIEW

がんの新規治療法開発や研究者の育成

すこやかな「次代」と「人」を創る研究拠点大学へ



先端がん治療研究と生涯サポートで健康な社会づくり

文部科学省の2017年度「私立大学研究ブランディング事業」タイプA（社会展開型）に、久留米大学が申請した「すこやかな『次代』と『人』を創る研究拠点大学へ～先端がん治療・研究による挑戦～」事業が選定されました。

同事業は「先端がん治療研究」をメインに展開します。本学はがんの新規診断法や治療法につながる可能性のある研究シーズを多数保有しており、それらのシーズを発掘し、がんの早期発見・診断や治療法開発、予防法へと応用展開を図るとともに研究者を育成します。

がん治療研究に加えて、妊娠や出産から健康増進、疾病予防、高度な医療の開発・提供までの生涯サポートも重要なテーマの一つです。

医学部や久留米大学病院、さらには17年開設の「人間健康学部」といった「人」をテーマにした学部などと横断的に取り組み、地域と共に発展できる「研究拠点大学」を目指します。

文部科学省

私立大学

研究ブランディング事業

学長のリーダーシップの下、大学の特色ある研究を軸として、全学的な独自色を大きく打ち出す私立大学などを文部科学省が重点的にサポートする取り組み。久留米大学が選定された2017年度は、188校が申請し60校が選定されました。内訳：タイプA<社会展開型>123校申請33校選定、タイプB<世界展開型>65校申請27校選定。



“医者のまち”久留米市のポテンシャル

久留米大学が立地する福岡県久留米市は「医者のまち」と呼ばれるほど、医療体制が充実しています。政令市・中核市の中で人口あたりの医師数が多く（人口10万人あたり医師数が568.5人）、病院・診療所数も全国6位となるなど（2012年調査）、数字の面でも安心・安全を実感できます。より医療に特化したまちにしようと、久留米市は地方創生戦略の中で「がんワクチンなど次世代医薬品の研究開発支援」「がん治療拠点化の推進」などを進め、本学も連携し、共に取り組んでいます。

研究所・センター・病院

御井キャンパス

●情報教育センター ●外国語教育研究所 ●国際交流センター ●基盤教育研究センター ●地域連携センター ●IR室 ●比較文化研究所 ●健康・スポーツ科学センター ●保健管理センター（御井キャンパス 分室） ●学生支援室 ●ビジネス研究所 ●経済社会研究所

旭町キャンパス

●先端癌治療研究センター ●認定看護師教育センター ●保健管理センター ●バイオ統計センター ●大学病院 ●循環器病研究所 ●高次脳疾患研究所 ●皮膚細胞生物学研究所 ●分子生命科学研究所 ●ビジネス研究所（旭町キャンパス 分室）

国分町

●がんワクチンセンター ●医療センター

日本一住みやすいまちを目指す 先進的な問題解決地域
「久留米大学」+「久留米市」+「北部九州」の発展

ADVANCED

RESEARCH

先端癌治療研究センター

先進的ながん治療・研究を促進

二つのがん療法を研究

久留米大学先端癌治療研究センターは、がん療法の「がんワクチン療法」と「New FP療法」を主に研究しています。がんワクチンは体内の免疫細胞を活性化するためのアクセセルの役目を果たします。ペプチド（タンパク質の断片）ワクチン療法はがん抗原ペプチドを体外から投与し、がん細胞に対する免疫力を増進させてがん細胞を抑え込みます。本学では31種類のペプチドワクチンの中から個々の患者さんに適した3〜4種類を接種する「テラーメイドがんペプチドワクチン療法」を独自に開発しました。現在、米国で肺がん患者を対象にした臨床試験が実施されています。

仕組みづくりを進行中

New FP療法は本学が確立した肝がんに対する新たな治療法です。患者さんの足の付け根から血管の中にカテーテル（細長い管）を入れ、肝臓の血管の詰まった部位に直接抗がん剤を注入します。高度なテクニックを要しますが、従来は手術不能だった症例においても、本治療でがんを小さくし完全に切除することが可能になりました。本治療を普及させる目的で、全国の医師や看護師などを対象にした教育研修会も本学で実施しています。

現在、ペプチドワクチンの次の段階として、新たなワクチンを開発しています。がんの新たな診断や治療につながる可能性のある研究の促進や実用化に向けての仕組みづくりも進行中です。

先端癌治療研究センター所長

山田 亮

1986年九州大学大学院博士課程修了、同年久留米大学医学部免疫学講座助手（95年講師、99年助教授）、87年米国カンザス大学留学、88年米国ハーバード大学 Dana-Faber 癌研究所留学。2003年久留米大学先端癌治療研究センター教授、09〜13年同センター所長、13年久留米大学先端癌治療研究センターがんワクチン分子部門 部門長。16年より現職。

「がん征圧」に向けた治療・研究の本拠地

3部門で構成される
「久留米大学先端癌治療
研究センター」

がんワクチン分子部門

「テラーメイドがんペプチドワクチン」を開発しています。多くの基礎研究を経て、1999年にがんペプチドワクチンの臨床試験を国内で初めて開始。その後、先進医療としての承認や実用化に向けてのベンチャー設立など日本のがんワクチン開発をリードしています。



肝癌部門

北部九州は肝がん患者さんが多いことから、肝がんの征圧を目指して設立しました。肝がんの発生するメカニズムを解明し、治療薬や進行した肝がんの治療法を開発。New FP療法という新たな治療法も生み出し全国への普及にも努めています。



分子標的部門

がん細胞に特有の分子を狙い撃ちするのが分子標的治療です。複数のグループ（呼吸器・神経・膠原病内科、消化器外科、肝胆膵外科、産婦人科、脳神経外科、整形外科、放射線科、血液・腫瘍内科、病理学、病院病理部）が連携し、新たな標的分子を探索しています。



医学部病理学講座

全国規模の病理診断に貢献

医療の根幹となる病理診断

病理学は患者さんの適切な治療のために細胞診断や生検組織診断などの病理診断や病気の成因に関する研究をする、いわば医療の根幹となる分野です。医学部病理学講座(旧二病理)は血液がん、とりわけリンパ系の腫瘍に多く携わっています。全国で年間に発生するリンパ腫は約1万8000症例。そのうち3000~4000症例の病理診断をここで手掛けています。リンパ腫は詳しく分類すると70~80種もあり、それぞれに治療法や生存率なども異なるので迅速で正確な病理診断が重要です。

がん治療においても重要な役割を担う

どんながんでも正確な病理診断を得ないことには適正な治療はできません。いわば私たちは患者さんと臨床との橋渡し役です。また外科手術で摘出されたがんの組織を適切に処理し、病理組織標本を作成。患者さんの同意を得て、その標本を使って今後の医療に生かす研究を行っています。がんペプチドワクチンの開発においては、がん細胞にあるタンパク質の解析や個々の患者さんに最適なペプチドワクチンの組み合わせの検証にも関わりました。



久留米大学医学部病理学講座 主任教授 **大島 孝一**

1984年九州大学医学部卒業。88年ドイツツッブルグ大学留学。2005年久留米大学医学部病理学教室教授。日本病理学会専門医(病理専門研修指導医)、日本病理学会評議員、日本癌学会評議員、日本リンパ網内系学会常任理事。18年に世界的なリンパ腫病理の専門家約30人(日本から2人)で構成されるILSG(International Lymphoma Study Group)のメンバーに選出。

バイオ統計センター

医学研究科の大学院生や委託研究生に対して、臨床研究やゲノム創薬、テラーメイド医療で活躍するための人材養成を行っています。これが実現しているのは、国内外の最高レベルの教員や研究者の協力に加えて、医学部各講座、附置研究施設、臨床研究センター、トランスレーショナル・リサーチセンター、統計数理研究所、財団法人放射線影響研究所、ワシントン大学、エール大学など国内外の研究機関や産業機関との連携のおかげです。実践的統計学教育を大学院生や医学部医学科、看護学科を対象に実施し、「リテラシーとしてのバイオ統計学」の習得を目指しています。



研究施設

高次脳疾患研究所

前身は1963年に設置した脳疾患研究所で、2002年4月に大学附置の高次脳疾患研究所として改組し、文部科学省私立大学オープンリサーチセンター整備事業に選定。2012年4月から3年間同省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に選ばれました。「予防から考える地域包括支援システムの構築と新薬開発」「発育期脳障害の早期発見、介入・治療：福岡県南部における社会実装」を主なテーマとして研究を行っています。



皮膚細胞生物学研究所

2001年に文部科学省私立大学オープンリサーチセンター整備事業に採択され、日本初の皮膚基礎研究所として開設された久留米大学医学部皮膚科学講座オープンリサーチセンターです。2010年1月に大学附置研究所として改組・新設。医学部皮膚科学講座や他の施設と共同研究を進めるため、久留米大学医学部キャンパス内に研究室などが設置されています。



循環器病研究所

循環器病研究所では、内科・外科・小児科が連携して病態研究に取り組んでいます。「今ないものを世の中に」を標榜しており、研究成果を発信し、研究を通じて課題発見・解決力を身に付けた人材を世に送り出すことが使命です。若手メンバーが主体的に循環器疾患の謎に挑戦する舞台として、高度な解析や論理思考の支援体制を備えています。2018年に基礎3号館に移転した当研究所は、メンバーの成長とともに日々進化を続けています。



分子生命科学研究所

1989年、バイオサイエンス分野の研究促進を目的に開設。2015年度より文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に選定されました。「ミトコンドリアの融合・分裂機構」「未知のホルモンの探索と機能の解析」「酵母を使った栄養飢餓状態の研究」などの研究を行っています。研究の成果は国内外の学会や科学雑誌などでも発表されています。2018年4月から研究所を旭町キャンパスの基礎3号館に移転し、最先端の設備を備えた研究所となりました。



がんワクチンセンター

久留米大学で開発したがんペプチドワクチンの有効性を検証し、薬事法に基づく承認を目指し2013年に設立。世界中から注目されているがん免疫療法の研究・開発やその臨床試験を積極的に実施。全国で初めてがんワクチン外来を設けた2009年度以降、日本だけでなく中国や台湾、タイなどの海外からも3500名以上のがん患者さんが受診しており、今後も新しいがん治療の確立を目指していきます。





大学病院 放射線腫瘍センター

最先端の治療機器と専門のスタッフで 患者さんに優しい治療の最前線へ

最新機器を導入し、負担減の治療を実現

前身の放射線治療センターの老朽化や狭小化が進み2018年、久留米大学病院放射線腫瘍センターは環境や医療機器を充実させ開設に至りました。CTと照射装置が一体化した「トモセラピー」の九州初となる最新機器や、既存の機器に比べ放射線照射の時間を2分の1から3分の1に短縮する「トゥルービーム」など、新たな治療機器3台を導入しているのが特長です。早期から進行まで全てのがん治療に対応し、より高精度で患者さんに負担の少ない治療を実現していきます。

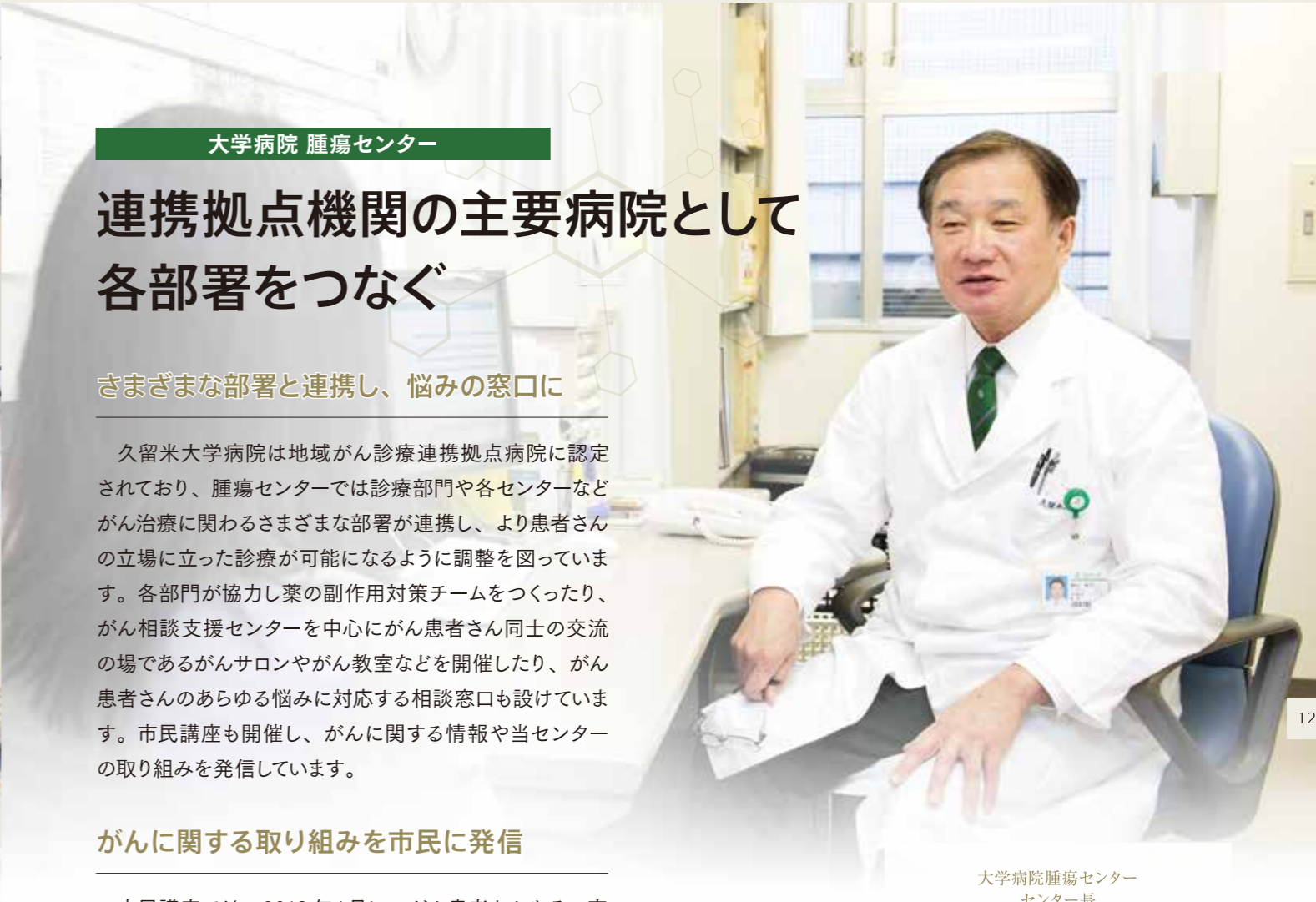
放射線に特化した充実したスタッフ

当施設には放射線治療に特化したスタッフ（医師・物理士・品質管理士・診療放射線技師・看護師・受付・補助員）がそろっているのも強みです。それぞれが連携し患者さんにどう寄り添いながら、どうより良い治療を提供できるか、という根源的な研究を深めていけると考えます。また保存してきた50年分の患者さんのデータを使い独自の研究もできます。国内ではがん患者さんの約4割が放射線治療を受けるので、研究を進め、さらに地域医療に貢献していきたいです。

大学病院放射線腫瘍センター
センター長

淡河 恵津世

1988年久留米大学医学部卒業、同年久留米大学医学部放射線科入局。2009～11年久留米大学医学部放射線科准教授。10年一般財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団理事（兼務）。11～14年久留米大学医学部重粒子線がん治療講座教授、14年久留米大学病院放射線治療センター教授。18年10月より現職。専門分野は小児がん。



大学病院 腫瘍センター

連携拠点機関の主要病院として 各部署をつなぐ

さまざまな部署と連携し、悩みの窓口

久留米大学病院は地域がん診療連携拠点病院に認定されており、腫瘍センターでは診療部門や各センターなどがん治療に関わるさまざまな部署が連携し、より患者さんの立場に立った診療が可能になるように調整を図っています。各部門が協力し薬の副作用対策チームをつくったり、がん相談支援センターを中心にがん患者さん同士の交流の場であるがんサロンやがん教室などを開催したり、がん患者さんのあらゆる悩みに対応する相談窓口も設けています。市民講座も開催し、がんに関する情報や当センターの取り組みを発信しています。

がんに関する取り組みを市民に発信

市民講座では、2018年1月に、がん患者さんやその家族の悩みを支える取り組みをお知らせすることを目的に、タレントの原千晶さんや筑後ブロックがん相談支援センター連絡協議会代表を務める本学の病理医、がん相談支援センターのスタッフの講演を実施しました。2019年1月には、がん患者さんの就労支援をテーマに、厚生労働省の職員の方による国の就労支援施策の解説や本学の泌尿器科や放射線腫瘍センター教授による当施設のがん診療の取り組みに関する講演を行いました。

大学病院腫瘍センター
センター長

鳥村 拓司

1982年久留米大学医学部卒業、同年第二内科入局。2004年久留米大学医学部准教授、06年久留米大学病院肝がんセンターセンター長、11年久留米大学先端癌治療研究センター教授、13年同センター肝臓部門 部門長、14年久留米大学医学部内科学講座消化器内科部門教授、16年久留米大学病院副院長・同病院腫瘍センターセンター長。専門は肝細胞がんの基礎的研究。

がん治療の横断的な役割を果たし、根治に挑む

放射線腫瘍センターは、がん診療の横断的な役割を果たします。脳腫瘍、頭頸部がん、肺がん、乳がん、食道がん、膵臓がんなど、ほぼすべての領域のがんで、早期がんの根治治療から進行がんの緩和治療まで手掛けます。センター

の要となる最新設備。筑後地区における最新のがん治療機器として、がんの根治に挑みます。治療方針については、放射線治療専門医師が的確に判断します。



治療部門と連携し、交流会やがん教室も開催

久留米大学病院で実際のがん治療に関係する部署は、内科および外科系の診療部門、がん集学治療センターや外来治療センターのような化学療法を行う部門、放射線腫瘍センター、緩和ケアセンターなど多岐にわたります。腫瘍

センターではこのような治療部門と連携し、患者さんやご家族からの相談に応じるがん相談支援センターやがんに関する交流会としてのがんサロン、がん教室なども積極的に実施しています。





久留米大学病院

いのち
人と地球にやさしい、生命を慈しむ医療を提供



ドクターヘリやドクターカーを導入し
救命率向上や後遺症軽減を実現

ドクターヘリやドクターカーを導入している高度救命救急センターは、早期治療開始による救命率の向上や後遺症の軽減を実現しています。災害時には災害医療派遣チーム「DMAT」を派遣。救急搬入された患者さんの初期治療から退院までの診療をできる体制を整えています。



ハイブリッド手術室とダヴィンチなどで
先端医療のその先を目指す

久留米大学病院は先進医療に積極的に取り組んでいます。2013年にはハイブリッド手術室が完成し、カテーテル手術と通常手術を同時に行えるようになりました。2016年にはダヴィンチ（内視鏡手術支援ロボット）による前立腺がんの手術もスタート。患者さんの体への負担も軽減しました。

緩和ケアセンター

がんによる身体や心の痛みなどの苦痛を和らげ、ご家族と一緒に穏やかに充実した日常生活を過ごしていただくための医療を提供しています。がんの治癒を目的とした治療は行っていませんが、大学病院の知識と技術を利用して、患者さんの症状緩和に対する治療を行っています。家族との面会は24時間可能で、付き添い食なども用意できます。症状が緩和されご自宅での生活を望まれる場合、退院の準備や外泊、外出などもサポートしています。



【診療科】
呼吸器・神経・膠原病内科、消化器内科、心臓・血管内科、腎臓内科、内分泌代謝内科、血液・腫瘍内科、精神神経科、小児科、外科、整形外科、形成外科・顎顔面外科、脳神経外科、小児外科、皮膚科、泌尿器科、産科、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、放射線科、麻酔科、歯科口腔医療センター

【診療部】
消化器病センター、循環器病センター、呼吸器病センター、内科総合外来、乳腺外来・一般外科総合外来、画像診断センター、放射線腫瘍センター、核医学・PETセンター、超音波診断センター、臨床検査部、中央手術部、高度救命救急センター、集中治療部、リハビリテーション部、腎臓センター、病理部、がん集学治療センター、緩和ケアセンター、総合周産期母子医療センター、外来治療センター、総合健診センター

【その他】
薬剤部、看護部、中央滅菌材料部、栄養部、臨床工学センター、医療安全管理部、内視鏡手術センター、病院情報センター、栄養治療部、腫瘍センター、医療連携センター、臨床研修センター、感染制御部、臨床研究センター、高難度新規医療技術管理部、未承認新規医薬品・医療機器管理部、保険診療管理部、事務部

■病床数/23病棟 ■許可病床数/一般病棟965、精神病棟53、計1018床

久留米大学医療センター

心が通い、信頼される医療で地域を支える

診療から回復まで幅広くケア

医療センターでは、「心が通い、信頼される医療」を理念に患者さんを中心とした医療に取り組んでいます。整形外科・関節外科センター、リハビリテーションセンターでは従来の診療に加え、スポーツ外傷から上肢・下肢全体の関節疾患の診療から回復まで幅広く手掛けています。



ユニークな診療科や部門も

漢方医学と西洋医学の各メリットを組み合わせた先進漢方治療センター、足病変の総合的治療や褥瘡などを含めた皮膚潰瘍（難治性創傷）の治療も行う足病変（フットケア）・皮膚潰瘍治療外来など、ユニークな診療科・部門を多数そろえています。



総合診療科、地域包括ケア病棟等の開設

総合診療科、プライマリ・ケアセンター、地域包括ケア病棟を開設して、難渋されている患者さんの診療や地域密着型医療の推進を担う医療人の育成にも取り組んでいます。



フクロウ外来

朝起きが苦手で、午前中はなかなか元気に活動することが難しく、登校や通勤、家事といった日常生活ができないが、夕方から夜にかけては比較的に症状が軽快する方を漢方医学では「フクロウ型体質」と呼んでいます。そのような方は周囲の理解が得られず、つらい思いを続けているケースもあります。フクロウ外来では、西洋医学で疾病の有無を判定し、漢方薬などの東洋医学療法を組み合わせ、治療します。



【診療部門】

総合診療科、消化器内科、循環器内科、精神科、小児科、内分泌代謝内科、整形外科・関節外科センター、リハビリテーション科、リウマチ・膠原病センター、皮膚科、泌尿器科、足病変・皮膚潰瘍治療外来、眼科、放射線科、麻酔科、病理診断科、呼吸器内科、先進漢方治療センター、プライマリ・ケアセンター、もの忘れ外来、がんワクチンセンター、禁煙外来、セカンドオピニオン外来（乳腺病理）

【その他】

看護部、看護外来、画像センター、リハビリテーションセンター、栄養室、薬剤室、臨床検査室、臨床工学室、医療安全・感染対策室、医療連携室

■病床数/5病棟 ■許可病床数/一般病棟150床、回復期リハビリテーション病棟50床、地域包括ケア病棟50床、計250床



副学長
前医学部長

内村 直尚

1982年久留米大学医学部卒業、86年久留米大学大学院医学研究科生理系専攻博士課程修了。その後久留米大学医学部神経精神医学講座講師、同講座助教授を経て、2007年久留米大学医学部神経精神医学講座教授。11年4月久留米大学病院副院長（～13年3月）。12年4月久留米大学高次脳疾患研究所所長。13年4月から久留米大学医学部長（～19年3月）、16年10月から久留米大学副学長。

医学部

未来の医療を拓くリサーチマインド

医療人としてさらに質を向上

本学の医学部では特に「リサーチマインド」を重視し、学生の頃から探求心が育つ仕組みづくりをしています。2017年度の3年生から新たなカリキュラムを導入。3年生の秋に本人が希望する国内外の研究室に6週間所属して研究に携わり、その成果を発表するというプログラムを実施しています。学生が各種シミュレーターを使って医療技術を磨くことができる施設を、2018年4月に臨床スキル・トレーニングセンターとして充実させ、医療人としてのさらなる質の向上を後押ししています。

豊かな人間力を備えた人づくり

医学部は高度医療の提供以外にも、がんの治療と仕事の両立を目指す多くの患者さんやそのご家族をさまざまな医療職や地域の開業医などと連携して支えていく医療人の養成も大事な課題です。そのためには豊かな人間力を備えた人づくりにいっそう注力しなければなりません。2017年度には主体的・能動的な学習を行い仲間と教え合いながらコミュニケーション力や支え合う心を養い、チーム医療への対応力を身に付ける協同学習を導入するなど、取り組みを強化しています。

医学部各学科の紹介



幅広い教養と高い倫理観を備え 地域の医療を牽引する医師へ

「時代や社会、そして地域の多様なニーズに対応できる実践的でヒューマンズムに富む医師を育成するとともに、高水準の医療や最先端の研究を推進する人材を育成する」を教育目的とする医学科。豊かな人間性、幅広い教養、高い倫理観を備え、地域の医療を牽引する医師を育成しようと、各学年において独自の体制や特長ある教育方法を取り入れています。医師を目指す者として必須の内容を明確にし、その精選された基本的内容を重点的に学ぶ「コア・カリキュラム」、第4学年後期～第6学年前期に実際の医療チームに参加し、医師に必要な知識や技能、態度を身に付ける「クリニカル・クラークシップ」などを展開しています。



実地研修や座学を通じ 看護のこころを身に付けられる

「豊かな人間性と倫理観を培い、看護の実践・教育・研究を推進し、人類普遍の生きる力に光を与え、広く社会的使命を果たせる人材を育成する」を教育目的とする看護学科。現在、看護を志す人に求められているのは技術や知識に加えて、患者の立場に立って献身的に支える看護のこころです。そこで看護学科では感性や創造力を育成する基礎教育科目を基盤として、専門科目や臨地実習をとおして、確実な知識と技術を持ち、看護のこころを身に付けた看護師や保健師を育成しています。大学に隣接する久留米大学病院や医療センターで実習を行うなど、最新の医学や医療技術を学べる恵まれた教育環境が整っています。

TOPICS

大学院医学研究科

医学研究科	
修士課程	博士課程
医科学専攻	生理系専攻
基礎医学群	病理系専攻
社会医学群	社会医学系専攻
総合生命科学・バイオ統計学専攻	個別最適医療系専攻
総合生命科学群	
バイオ統計学群	
看護学専攻	
修士論文コース	専門職養成コース

生命への限りない探究心で医学の可能性に挑む。 がん専門医療人材の育成も。

医学研究科は、医学・医療の分野で先駆的な学術研究を推進するとともに、幅広い視野、高度の専門性と豊かな教養および人間性を備え、国際的に活躍し、地域医療に貢献しうる優れた人材を育成することを目的としています。
「がん看護分野専門看護師養成

課程」など、本事業の中心となる「がん」に関する専門職養成コースをはじめ総合生命科学・バイオ統計学など多彩な専攻分野で、地域で核となる教育者や高度な職業人、国際的にも活躍しうる臨床家、研究者を育成しています。



人間健康学部
(総合子ども学科・スポーツ医科学科)
学部長

濱崎 裕子

1975年大阪大学工学部卒業。同大やテキサス大学大学院を経て、千葉大学大学院自然科学研究科博士課程修了。2010年より久留米大学文学部教授。15年同大学文学部学部長。17年人間健康学部学部長に就任。工学博士、一級建築士。福岡県まちづくり専門家。専門分野はコミュニティ福祉学、高齢者/子ども施設環境計画、都市計画・まちづくり。

人間健康学部

医学部を持つ久留米大学の強みを生かした「文医融合の新学部」

充実した体験型科目、医学知識や技術も修得

2017年に開設した人間健康学部。本学では経済学部設置以降23年ぶりに開設された新しい学部です。医学部を持つ本学の強みを生かした「文医融合型学部」ということが最大の長。学部共通科目の中に医学部の専門教員が講義する「医学総論」や「基礎小児医学」など11科目があり、子育てやスポーツにとどまらない、医学知識や技術を身に付けられます。さらにフィールドワークやサービラーニングなど体験型の科目も多数カリキュラムに組み込んでいます。総合子ども学科では保育士や幼稚園教諭の資格、スポーツ医科学科では中学校・高等学校教諭一種免許状（保健体育）などが取得可能です。

地域の安心できる子育ての基盤づくりに貢献

人間健康学部は本学の基本理念である「地域に貢献する実践的人材の育成」に基づき基本理念を作成しました。そのため地域や行政との連携に注力しています。総合子ども学科は学科構想時から行政と勉強会を重ね、2017年10月に久留米市子ども子育てサポートセンターが開設後も継続しています。さらに保育所や幼稚園との連携や地域の子ども・家庭支援機能を高め、地域の安心できる子育ての基盤づくりのため、地域や専門機関との協働体制を築いていきます。スポーツ医科学科はラグビーやサッカーなど地元プロスポーツとの連携や、マラソン大会でのセーフティネット構築などのマネジメントサポートも進めています。

人間健康学部各学科の紹介

総合子ども学科



子育てについて総合的に学び
地域との連携も現場で体得

幼児教育学や保育学をベースに医学や心理学、社会学、福祉学など幅広い分野にわたる総合教育で理解を深めます。保育士や幼稚園教諭を育成する科目だけでなく、「子どもの健康支援」「子どもの発達支援」「地域の子ども・家庭支援」の3領域の専門科目の中から、自由に選択でき、子どもについてより専門的な知識や技術、実践的能力などを得られます。さらに地域の子ども家庭支援の現場で体験学習や学外演習を実施するなど、子どもと家庭だけでなく、行政、専門機関や地域などとの連携方法も実践的に学べます。

スポーツ医科学科



医学的な知識を兼ね備えた
スポーツ・健康分野の人材を養成

医学部の全面的な協力を得て、人間の身体やスポーツ医学、スポーツ科学についての科学的・専門的な知識を学び、探求します。人間の発達段階に沿った身体の仕組みに関する知識を幅広く体系的に学ぶことでライフステージ全体にわたる医学的・科学的な専門知識とスポーツ・運動における支援の技術を身に付けることができます。スポーツ・健康分野の環境を支援する人材育成を行い、卒業後の進路は、中学校や高校の保健体育の教諭、スポーツ分野の公的機関・研究機関・企業、プロスポーツのトレーナーなどを想定しています。

TOPICS

大学院心理学研究科

前期博士課程

臨床心理学専攻

人間行動心理学専攻

後期博士課程

心理学専攻

人間の心と行動のメカニズムを科学する。
地域における「心」の支援活動も展開。

心理学研究科は、心理学の基礎的研究を中心とした学術研究の推進とともに、高度の心理学的な専門能力と実践力を有する人材の育成および独創的・先駆的な学術研究を推進できる心理学研究者の養成を目指します。

久留米大学大学院心理学研究科付属「心理教育相談センター」は、地域サービスの提供を目的に1997年に開設され、学外から来談される相談者の方々に対して、心理相談、発達相談、生活相談など幅広い「心」の支援を行っています。

産学官連携・地域貢献の取り組みで「次代」を創る

久留米大学は、基本理念に掲げる「地域文化に光を与え」の言葉どおり、産学官連携を推進し、さまざまな活動をとって地域社会に貢献することを目指しています。その範囲は地元の筑後川から海外、宇宙と幅広く、学生も積極的に参加しています。市民公開講座も数多く開催し、知の資源を地域に還元しています。

大学 × 企業

医学部グループと JAXA の共同研究

久留米大学医学部の志波直人教授らのグループは2012～14年にかけて、宇宙航空研究開発機構（JAXA）筑波宇宙センターと共同研究を行いました。研究内容は宇宙飛行士の筋力維持を図るトレーニング装置の開発。サポーターを通じて筋肉に電気刺激を与えて負荷を掛け、筋肉と骨を鍛える仕組みです。14年に国際宇宙ステーションにいる宇宙飛行士



で実証実験し、サポーターを付けた腕は出発前より1割程度筋肉量が増加。15年にはパナソニックと共同で一般用トレーニング機器として実用化しています。



- 1 高校生向けのがん出前授業
- 2 中学生向け講座
- 3 地域の課題解決型授業（ほとめきプロジェクト実習演習）
- 4 地元酒蔵と学生の共同開発による久留米大学酒（地域学演習）
- 5 包括連携企業筑後信用金庫の情報誌発刊に学生が参加
- 6 小中高校生向けの研究体験（ひらめき☆ときめきサイエンス）
- 7 久留米餅フェスタ
- 8 地元お茶農園等と学生による久留米大学茶開発

大学 × 企業

理化学研究所との共同研究所を開設

久留米大学と理化学研究所は2018年8月、「小児のビタミンDの代謝異常メカニズムの解明」の共同研究を目的に、旭町キャンパスに、「久留米大学-理化学研究所小児疾患共同研究室」を開設しました。小児のビタミンDの代謝異常は、くる病を代表とする成長障害を起こします。母乳はミルクよりもビタミンDが少なく、母子のビタミンD不足、栄養の偏りなどにより、近年くる病が増加。



共同研究では、母乳の解析を通じて、代謝異常を引き起こす原因物質を同定し、機能性食品の開発を目指します。



市民公開講座

さまざまなテーマで市民公開講座を開催し、知の資源を地域に還元しています（1例を紹介）

日本の古代史を邪馬台国と九州王朝について検討する

邪馬台国や古事記、日本書紀の舞台といわれる北部九州、その中でも筑後と肥後の古代史について考察されるべきことを解説します。邪馬台国の女王だった卑弥呼と神武天皇の足跡、有明海や筑後川流域の地名、古墳・神社との関係についても考察します。演題は「徐福と邪馬台国」「邪馬台国の位置」「邪馬台国とは何か?」「邪馬台国と神武天皇」。

緩和ケアを身近に感じるために

緩和ケアについての理解が深まるカリキュラムで、必要時に使えるよう実践的に解説します。講師は久留米大学病院緩和ケアチームのメンバーの4人が担当。演題は「知って欲しい!緩和ケア」「がんになって起きる身体の変化とその緩和ケア」「がん患者とご家族の気持ちのつらさと緩和ケア」「緩和ケア病棟ってどんなところ」。(受講料無料)

がん患者の心のケア

「不治の病」から「治る病気」へと変わりつつあるがん。「がん患者の心のケア」について、久留米大学先端医療研究センター、医学部看護学科、文学部心理学科、久留米大学病院腫瘍センターのスタッフが、それぞれの立場から解説します。本講座は私立大学研究ブランディング事業の一環で開催しています。演題は「がんと共に豊かに生きる」など。(受講料無料)

学生 × 地域

災害支援、復興支援の取り組み

2017年5月に起こった九州北部豪雨、2018年7月の西日本豪雨では、久留米大学近隣の地域が大きな被害を受けました。それを受け学生有志らが久留米市災害ボランティアセンターと連携し、ボランティア活動に参加しました。その他の地域でも積極的に支援活動を続けています。また、文学部社会福祉学科では「災害福祉論」、法学部では「被災地復興と地域貢献」を講義し、授業でもさまざまな災害支援、復興支援に取り組んでいます。



被災地復興と地域貢献」を講義し、授業でもさまざまな災害支援、復興支援に取り組んでいます。

大学 × 地域

イタリアで筑後の伝統工芸のワークショップを開催

久留米大学文化財保存科学研究会は2018年5月、イタリア・ローマの「ローマ日本文化会館」で八女手漉き和紙など筑後の伝統工芸を紹介するワークショップを開催しました。同部会では八女手漉き和紙による文化財の修復、久留米餅の天然藍による防虫・防菌効果などを研究。これらの価値をアピールするとともに、提灯や仏壇などの筑後の伝統工芸品



をパネル展示しました。さらに八女手漉き和紙手漉きのデモンストレーションや久留米餅の紹介なども行い、来場者は驚きの表情を浮かべていました。

大学(学生) × 地域

筑後川ブランド大会で流域の商品を学生がPR

久留米大学経済学部では、筑後川・矢部川流域の食品・飲料や日用品、工芸品を「筑後川ブランド」として認定する大会運営に参加しています。この取り組みには、学生が事業者のもとを訪れて取材を行い、共にPRして投票を呼びかけるなど、学生が主体的に関わっています。2018年の第3回大会では、28事業者の32商品に対して、インターネットや道の



駅等で投票を受け、11月下旬に開かれた「総選挙」で、「はねにんにくオイル」「久留米餅ガラス行灯」など4商品が選出されました。

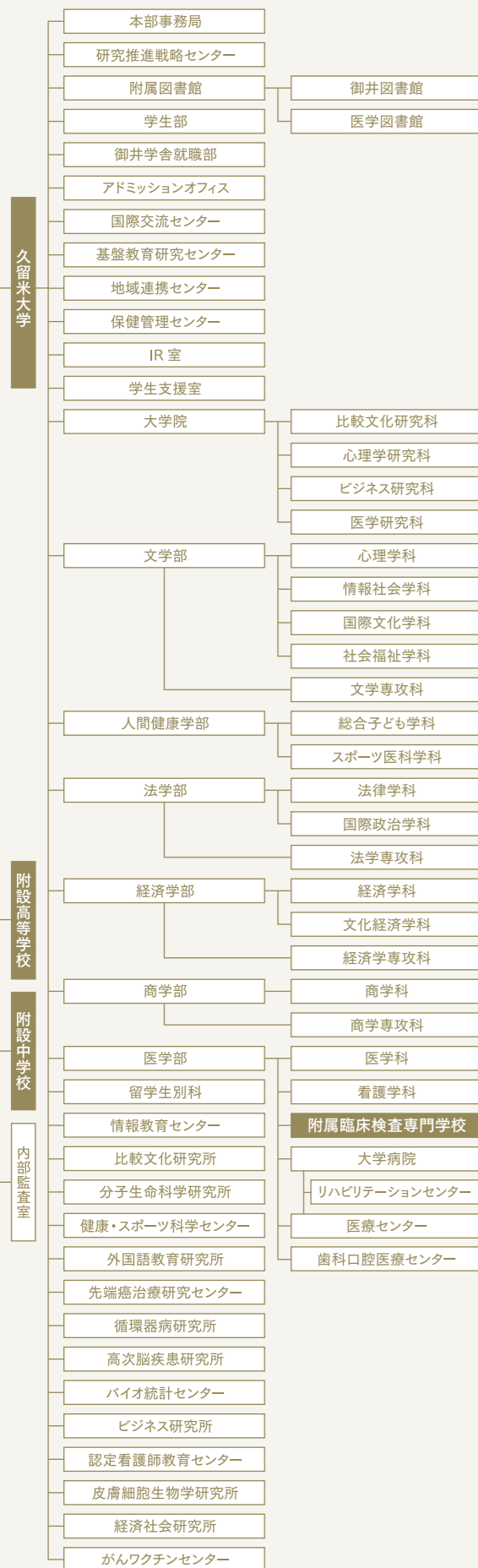
大学 × 地域 × 企業

福岡ソフトバンクホークスと筑後市によるイベントに参画

久留米大学人間健康学部スポーツ医科学科は2018年12月、筑後市のタマホームスタジアム筑後で児童を対象としたスポーツイベント「2018 ジュニアスポーツチャレンジ」に参画しました。福岡ソフトバンクホークス、本学が包括連携協定を結んでいる筑後市と協力し、同市内の親子約80人が参加。小学生の基礎体力の低下克服を目的に、体力測定や運動プ



ログラムを実施しました。スポーツ医科学科の学生は企画段階から参加し、スポーツ医科学の観点から効果的なプログラムとなるようアドバイスなどのサポートをしました。



附設高等学校



1950年に設立された久留米大学附設高等学校は「真に国家社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物を育成する」という建学の精神のもと、誇るべき人格の感性を目指す教育を行っています。在校生全員が大学進学を目指し、東京大学や京都大学、九州大学をはじめ、医学部にも多数の卒業生が進学しています。大学卒業後も国内外の政財界・学界を牽引する著名人を多数輩出しているのも、本学の特長です。

附設中学校



中高一貫教育を実施する目的で1969年に設立。教育的効果を高めるため、全ての施設を高等学校と共用し、教職員も双方の学校の教育に携わっています。6カ年一貫教育のメリットを生かし、中1中2の夏休みには発展的な課題や自由研究、中3では卒業論文や制作に取り組んでいます。完成した作品は審査後、展示会などを開き、卒業論文は中学卒業時に冊子としてまとめ、中学校の生徒全員に配布しています。

医学部附属 臨床検査専門学校



常に進化する医療現場で対応できる専門技術者を養成しようと誕生した医学部附属衛生検査技師学校を前身としています。医学部附属という特長を生かした質の高い教育で、臨床検査技師の国家試験受験資格を取得できるカリキュラムを組んでいます。医学科や看護学科との交流も多くあります。就職を希望する学生のほぼ100%が自身の希望する医療機関などへの就職を実現。約2100人の学生が多くの医療現場で活躍しています。

TOPICS

本学卒業生の横倉氏が 世界医師会の会長に

久留米大学医学部第14回卒業生で日本医師会長の横倉義武氏が2017年10月から1年間、「世界医師会」の会長を務めました。同会は113カ国・地域の医師会で作る国際的なNGO(非政府組織)で、日本医師会長がこの要職に就くのは横倉氏で3人目です。就任中は「誰でも安心して医療の恩恵を受けられる」日本の医療の良さを世界に広げ、世界平和に尽力されました。



横倉 義武氏

創立90周年事業で 教育・研究・医療環境を整備

創立90周年記念事業の一環として、「基礎3号館」「病院北館(総合複合棟・放射線腫瘍センター)」を新築、御井キャンパスや附設高中校、医療施設設備の整備などを行い、本学の教育・研究・医療の機能がさらに充実しました。基礎3号館には、離れた場所にあった久留米大学附置の研究施設などが設置され、研究機能の集約・効率化が図られました。産学連携の拠点となるベンチャースペースも設けられ、これまでの2倍のフロアとなった動物実験センターは九州でもトップクラスの研究施設として本学の研究を支えています。



「基礎3号館」の新築



病院北館(総合複合棟・放射線腫瘍センター)の新築



御井学舎施設設備整備



記念式典・祝賀会